

当事者が拓いていった若年男性がんピアサポート・グループ参加者の体験

古谷 浩 (指導教員: 村山 正治 教授)

序論

我が国のがん患者やその家族への精神的ケアには、非専門職が行う支援方法としてピアサポートがある。本論文では、実際に筆者が拓いていったピアサポート・グループ (以下 PSG) 参加者の体験を考察した。

本論

1. 研究1 ピアサポートグループ設立体験—7年間にわたる活動のスケッチ—

ピアサポートの立ち上げから、葛藤や考え方や行動の変化を論じ、PSG では雑談と自然な対話が必要となった。加えて、筆者の一人の人間としての体験などが重要になっていた。

2. 研究2 入院病棟内での若年男性がんピアサポート・グループ参加者の体験—たわいもない話の重要性—

PSG 参加者の体験を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) で分析した結果、重要な体験及びピアサポートの新しい知見を6個生成した。PSG で、たわいもない話ができる場合は、失っていた自己自体感を回復させ、その人がその人らしく当たり前で生きることができると場と考えられた。

総合考察

PSG で【たわいもない対話】ができる関係性は、ありのままの自分として失った自己自体感を感じられる体験となり、本研究の中で最も重要な体験であると考えられる。

ピアサポーターも相手との相互作用によって自分の体験が豊かになっていき、ピアサポーターとしての自分というものを形成していくもの考える。ピアサポートはお互いに同じ体験をした仲間が相互に助け合うことであり、ピアサポーター自身にとってもありのままの自分で居られるピアサポートでの体験が重要であることが明らかとなった。

結論

今までは言われてこなかった概念を知ることができた。また、当事者が研究を行うことは、当事者視点で考えることができたのも意義があると思われる。本研究において、ピアサポートでは何がおこっていて、なぜ必要かを示すことができたと考える。また支援者だけではなく、ピアサポートを受ける側もピアサポートの理解になり、我が国でのピアサポートの認知や参加者が増えるためのものを示唆できたことは大きな意義があると思われる。